



厚幌導水路宇隆工区の現場で、下山さん(右)と木立さん(左)

新ひだか町三石に本社を置く幌村建設(株)。地域の内外から、積極的な地域貢献活動と、誠実な対応で評判の建設会社です。2017年には設立から60年を数え、これまで郷土を愛し、地域を守る人材をたくさん育ててきました。

10年以上前に始まった厚真町とむかわ町を対象にした、勇払東部地区の国営かんがい排水事業で、幌村建設は2006年度から厚幌導水路の工事を担当してきました。昨年9月には「平成30年北海道胆振東部地震」の被害に遭い、現場は大変な数カ月だったようです。工期が迫る厚幌導水路で、工事を担当している下山国光さんと木立顕星さんに会ってきました。

北海道胆振東部地震への対応

2018年9月6日午前3時7分。厚真町で震度7を記録する「平成30年北海道胆振東部地震」が発生。この年の春から、厚真町で勇払東部(二期)地区厚幌導水

路宇隆工区の工事を担当している下山国光さんと木立顕星さんは、それぞれ別の宿に泊まっていました。むかわ町に宿泊していた木立さんは、車に乗って現場確認に向かおうとしましたが、道路が土砂に埋もれ、断念。明るくなるのを待って、今後の対応を考えることになりました。「あちこちで道路はガタガタでした」と、あの日を振り返ります。

二人が毎日通っていた現場事務所も被害に遭いました。山裾沿いにあったプレハブの事務所は、裏山が地滑りを起こし、中はぐちゃぐちゃ。建物が傾いて危険なため、移転を余儀なくされました。「当初は工事をどうするのかという話にもならないような状況でした」と、下山さんも直後の混乱ぶりを思い出します。

地震から1カ月ほどは、災害復旧が第一。下山さんは、被害を受けた厚幌導水路の調査に奔走します。二人が担当していた厚幌導水路工事は、農業用水の確保と安定供給を図ることで、農業の生産性向上や農業経

営の安定化を目指して、10年以上前から進めてきており、2018年春から利用が開始されたところでした。

下山さんは、2016年度にも現場代理人と監理技術者として、近くにある厚幌導水路ウクル川の横断工事を担当していました。「あの工事は今までにない大きな規模で、とても思い出に残っています。初めて経験することが多く、自分も勉強しながら、協力会社の皆さんの支えがあってようやく完成した工事でした。でも、9月の地震で、一晩で壊れてしまって…。漏水している箇所がほかでも見つかったようです。10数年かけて進めてきた一連の事業なので、たくさんの建設業の皆さんが関わっていました。僕らだけでなく、思い出のある人がたくさんいるはず」と、無念さをにじませます。

しばらくは工事を中断し、ほかの工区を担当している会社とともに、被害状況の調査をサポートするなど、地震への対応を優先し、本格的に工事を再開できるようになったのは11月でした。

一方、木立さんは土砂崩れで通行止めになった上幌内早来停車場線の緊急地震対応工事をたった一人で担当します。「距離は300mほどでしたが、土砂を撤去し、余震などで斜面が崩れても被害が広がらないように土のうを並べました。危険な斜面もあらかじめ土砂を撤去するなどの対応を行いました。一人で現場を担当したのは、これが初めて。2018年の現場はいろいろな意味で思い出深い仕事になりました」と言います。

土砂を運搬するダンプは多くても10台ほど、運搬用の道路は1車線のみで対面通行ができないため、土砂の運搬に時間がかかり、開通までには3週間ほどの時間を要しました。「着の身着のまま避難所に行った人は、自宅に帰れない状況が続いていました。それを解消できて、本当に良かった」と被災者を目の当たりにして、地域の皆さんの暮らしを守る役目と責任を改めて実感したようです。

人に恵まると、仕事もうまく運ぶ

厚幌導水路宇隆工区の工事で現場代理人を務める下山さんは、地元の新ひだか町育ち。登別市にある日本

工学院北海道専門学校の土木工学科を卒業し、地元就職したいと幌村建設に入社しました。この春で入社から21年、将来を期待される技術者です。2016年度に担当した厚幌導水路ウクル川横断工事は、17年度に北海道開発局室蘭開発建設部長から優良工事等表彰を受賞するなど、いま社内で最も活躍している現場代理人です。「若いころは川や橋などの現場も担当しました。厚真町の仕事は2年前にも担当したので、思い出があります。今年は本当に忘れられない工事になりました」と話します。

木立さんも同じ新ひだか町の出身。国立苫小牧工業高等専門学校の情報工学科を卒業後、首都圏の大手石油精製・販売会社に入社しました。しかし、2年で退社。しばらくは職を転々としていたと言います。アパートの更新時期とお母様の体調不良の知らせが重なり、Uターンを決意。幌村建設(株)で常務取締役を務める父の姿を思い出し、「地元に戻るなら、今まで父がどんな仕事をしてきたのか、見てみようと思いました。最初は興味本位でした」と、幌村建設に入社することになります。幌村司社長や幌村佑規副社長とも顔なじみで、副社長とは小さなころから一緒に遊んでいた仲です。高専の卒業生だけあってのみ込みが早く、測量から写真管理、出来形管理などをしっかり理解し、次の時代を担う有望な技術者です。だからこそ、地震直後の緊急対応工事も一人で任されたのです。このときは、行政をはじめとする関係機関との調整から施工管理、竣工までをたった一人で担当しました。厚幌導水路宇隆工区でも下山さんから「もう一人前」と、数カ所に点在していた現場を任せられ、その意味でも今年の仕事は思い出深いものになりました。

「3つある現場のうち、2つを任せてもらっています。経験が浅いのに下山さんは僕を信頼してくれます。僕は現場だけを見ていればいいのですが、下山さんが現場代理人として近くにいるので、図面と合わないときはどうしたらいいのか、足りない機材があるからどうするのかなど、困ったときはすぐに相談できます。問題が起きたときにどう対応するかは、現場代理人の大変なところですが、自分でも一度は経験しないと、

下山さんをはじめ、ほかの先輩と対等に話ができない」と、ゆくゆくは現場代理人を任されるようになりたいと木立さんは目標を掲げます。

一方、下山さんは「この現場は人に恵まれました。木立君は一人で任せても全く心配がなかった」と、大変な災害に遭遇しながら、工事再開後は安心して進捗状況を見守っています。「自分が仕事を始めたころは、数年で現場を任されるような時代。先輩と一緒にの現場もありましたが、教えてもらうというよりは仕事のやり方を見て盗むような感じでした。木立君はすぐに相談してくれるし、しっかり考えて仕事に向き合っているの、本当に助かっています。コミュニケーション能力も高く、彼の性格が現場で生かされている」と木立さんを評価します。

木立さんは「下山さんの指示に、ずいぶん細かい、うるさいと思ったこともあります。後になると、やっておいてよかったと思うことばかり。高専時代に学んだ知識と、現場で必要な知識は全く違って、下山さんから学ぶことは多い。経験を踏まえた指導は、後から身に染みて実感する」とアドバイスを受け止めながらステップアップしています。

会社に根付く、地域貢献の精神

二人が勤務する幌村建設は、積極的に地域貢献活動に取り組んできています。例えば、日高管内には工業系の高校がなかったことから、1996年に当時、日高建設協会会長だった先代の幌村春雄社長は、日高高等技術専門校の長期課程・土木施工科を開校（現在は短期課程として実施）しています。2005年に会社を受け継いだ幌村司社長は、平常時の防災や災害時に専門分野

で支援する「北海道企業等防災サポーターバンク」に登録。8年ほど前からは日高地区の建設業の皆さんと一緒に、地域の河川で魚道清掃ボランティアを毎年実施しています。また、東日本大震災では、現地入りして住宅の修復に当たるなど、心のこもった対応を続けています。

「どんな現場でも必ずあいさつ回りをして、地域で困っていることがあれば、しっかり対応するように、という指示があります」と木立さん。春のゴミ拾い、夏には巨大しめ縄がある「みついし蓬萊山まつり」の会場設営など、代々引き継がれてきた活動は、幌村建設の伝統でもあります。「どの工事現場でもちょっとした地域の困りごとには対応しています」と下山さんも声をそろえます。その経験と蓄積は、北海道胆振東部地震の緊急対応にも生かされたと言えるでしょう。

「地震で工事ができない時期もありましたが、今は順調に進んでいて達成感があります」と言う木立さん。下山さんは「同じような工事でも毎回違うのが、この仕事の難しさ。でも、完成したときのうれしさは、どんな仕事でも同じです」と、表情がなごみます。

地震の影響で、二人が担当していた2018年度の工事は設計を変更し、3月20日に工期を終えました。しかし、地震で被害に遭った厚幌導水路の復旧工事は2019年度にも引き続き進められる予定です。完全な復旧までにはまだ少し時間はかかりそうですが、この貴重な経験を忘れず、地域を守る建設業の役割と災害に強い地域づくりを次の世代に引き継いでいってほしいと思います。



雪の中工事が進む厚幌導水路宇隆工区



導水路工事では、地下の作業も多い